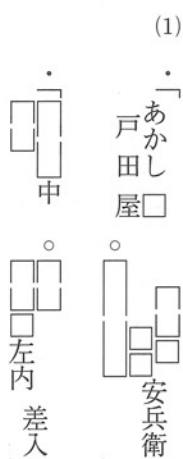


「西魚ノ丁」通りが東西に走り、調査地点南端で「中町」の屋敷の裏手と接している。

検出した遺構には、土坑・建物礎石・溝・井戸などがある。建物は調査区の北に続くとみられ、粘土を貼った上に礎石が認められた。調査区中央では井戸が二基見つかった。いずれも約一・六m下の礫層まで掘り込み、直径六〇cmの桶を据える。また、井戸に近接して廃棄土坑があり、唐津焼皿・伊万里焼碗など多量の遺物が出土している。

木簡は、北側の井戸の埋土から出土した。共伴遺物には肥前系磁器碗、京・信楽系陶器碗、明石播鉢、土師器皿、瓦片などがあり、井戸は一八世紀後半から一九世紀前半にかけて廃絶したとみられる。

8 木簡の釈文・内容



完存しているが、墨痕の状態が悪く判読は困難である。表面からみて中央左側に穿孔がある。

(稲原昭嘉)

甕った明石のタコ

播磨国加古郡淡葉郷の大鮪の荷札(二条大路木簡。「平城宮発掘調査出土木簡概報」二四、二九頁下段)は、八世紀では珍しい(と考えられていた)切り込みを下端にもつ〇三二型式の木簡の一例とされ、『日本古代木簡集成』にも収載されている。しかし、従来の接続の一部に誤りがあり、上端にも切り込みのある〇三一型式であったことが、先年行なった再撮影の機会に判明した。木簡の写真撮影は、記帳と称する読み取り記録に基づくのが常だが、偶々木簡そのものに則して断片を接合させた結果であった。接続を誤っていた断片には墨痕がないためか、観察が不十分だったのである。木を見ることが重要性を再認識した調査の一齣であった(その成果は『日本古代木簡集成』第二刷において写真の差し替え・釈文の訂正として生かされている)。(渡辺晃宏)

